

時津東小学校 研究発表会

時間内にお答えできなかった質問の回答

(抜粋になります。)

1. 2年生授業について

Q. 子供たちが自然と相手を見つけて、対話で熱く思いを伝え合っていたのが印象的でした。発表する子供も、思いをしっかりと持ち、語っていました。これまでにどのような指導や声掛けをしたのかといった経緯、どのような変容があったか教えてください。

まず、「聞く」ことの重要性を意識できるよう、授業の中で繰り返し意識付けを行いました。そして、「聞く」ができるようになったら、「反応」を重点的に指導しました。2年生の中には、話を理解できていなくても、そのまま周囲と同じような反応をして、やり過ごしている子も最初はいましたが、「繰り返して」「○○さんが言ったことはつまりどういうこと？」という投げかけを日常的に何度も行うことで、話を聞いて、理解し、自分の言葉でアウトプットするというサイクルが少しずつ定着していったように感じます。また、「聞く」「反応」の段階をクリアすることができた後は、友達との話の仕方について指導を進めました。「へえ～」「なるほど」だけで会話が終わってしまうのではなく、友達の意見を受けて、「でも」「つまりこういうことがいいの？」など、話を広げ、深めていくことを指導しました。朝の会のプログラムにも、対話の活動を取り入れていました。「将来役立つのは、国語と算数どっちだと思う？」などのお題をもとに、話をしていくような簡単な内容です。その取組を継続して行うことで、相手意識をもって理由を伝えることや、納得させるための話し方、相手の意見の受容の仕方などが、自然と身についたように感じます。時には、面白いお題も用意して、友達と話をすることの楽しさや面白さを子どもたちが感じるように気をつけました。やらされているからやるのではなく、自分がしたいから、友達と話したいから、楽しみたいから話合いをしたいと自然と思うことができることを心がけて働きかけをしていました。本当に当たり前のことなのですが、「継続すること」がとても大切なのではないかなと感じています。

Q. 考えをもつ活動の中で、子どもたちが相手を見つけて話し合っていたが、その選択はネームカードを見て動いていたのか。普段から誰とつながった方が学びが深まる経験の場が作られているのか、お尋ねしたい。

高学年では、クロムブックのスプレッドシートを活用して、学びの選択を行っていましたが、低学年の子供たちには技術的に難しい部分が多かったため、現時点ではネームプレートで学びの選択を行っています。

子どもたちはネームプレートを見て相手を決め、話をしています。また、他の学習では、ハンドサインで自分の意志を示し、ハンドサインが自分と違う相手を見つけて話をしたりする経験もしているため、今回も何人かはハンドサインで相手を見つけている児童もいました。これまでの授業の中で、学びを調整する際、分からない者同士で話をしても、分からないままであるという経験をしているため、「この人と話をしたら良さそうだ」という予想のもとに、相手を見つけている子どももいたと思います。相手を見つける時は、同じ考えの人と話をし、学びを深めてもい

いし、自分と違う考えの人と話をし、自分の考えと比べてもよい、どちらにもよさがあることを伝えていきます。

Q. 今回の単元では、問いが1つだけでしたが、問いをいくつかたてるパターンの授業もされていますか。その場合は、低学年でどのようにされていますか。

問いをいくつか立てる場合ももちろんあります。基調提案の説明にあったように、「みんなの問い」は多くても3つ程度に絞るようにします。入門期である低学年では、内容・構成の把握の過程に重点が置かれていることが多いので、そこに時間がかかるのは然りです。しかし、低学年でも、内容の把握をしっかりと行った後に、「みんなの問い」を立てると、問いも精選され、かなり焦点化されたものだけが残ります。それでも問いの焦点化をすることができなかった場合は、教師が意図的に教師モデルを見せたり、子どもたちを一度立ち止まらせるような問いかけをしたりして、何らかの手立てや工夫をしながら、問いをみんなで立てることができるようにしていました。低学年の段階では、「みんなの問い」を立てる際には、教師の支援も大切であると感じます。

2. 4年生授業について

Q. 特に国語科として、また国語科以外の指導全般で、意識してきたことは何か。具体的に教えていただきたい。話す時と反応の話型の意図と、型は全校共通なのか知りたい。

国語科においては、国語科で使用する言葉を身につけること、「問い」を立てる際には学習課題に立ち返ることや何を知りたい、問いたいのかを考えて分類すること、「問い」の解決にの場面においては、本文に根拠を求めることなどを意識させてきました。指導全般で意識させてきたことは、子どもたちが対話する際には、自分の考えを話すだけで終わらず、相手の考えに対して共感したり、尋ねたりして自分の言葉で対話をするように意識して指導してきました。話型としては「○○ですね。」「○○じゃないですか。」を使うように指導をしました。話す側が問いかけることで聞く側の反応を促して、対話的に進める効果があると考えています。反応については、「付け加えがあります。」「他にもあります。」など友達の発表を聞いたうえで、発表を重ねて考えを構築できるような反応を基本的な話型として、全校で学年の発達段階に応じたものを掲示して取り組んでいます。

Q. 児童に学習を委ねる場面が多く、学習に向かう児童の姿が輝いていた。あのような姿になるために、まず何から始めていけばよいのか。学習規律を整えることや、授業の展開を工夫することなど必要なことが多いのでお聞きしたいです。

本学級ではまず、「全員発表」をすることを目標に取り組んできました。またその際、自分の意見を発信することの大切さ、相手の意見に反応を示すことが相手の考えを大切にすることにつながることを指導してきました。継続して取り組んでいく中で、まだ発表できていない子が挙手した際に譲ってあげたり、他の子の発表に重ねて自分の考えを述べたりする姿が見られるようになり、互いの考えを大切にしていこうという雰囲気が生まれてきました。自分の考えを伝えても否定されないことのない安心感が、学習に向かう児童の姿につながっているのではないかと考えます。教師側としては、とにかく「自分から話さない」「待つ」ことを意識しています。

Q. 「はじめの問い」「みんなの問い（問いの吟味、精査）」に関わるガイダンス的な時間はいつ、どのように行っているか疑問に思いました。

「はじめの問い」「みんなの問い」に関わるガイダンスについては、4年生の初めの読む単元の際に行いました。これまでの積み重ねがあるので、手順や4年生でできるようにするべきポイントの確認程度の内容です。また、問いを立てる学習の前に手順を簡単に確認していましたが、できるようになってからは必要な人のみ配布した資料で確認するようにしています。学習の進め方についても昨年度から全校で足並みを揃えているので、流れや資料も「自分に必要なものを自分で選んで見る」というスタンスで指導しています。「問いの要件」についても、児童は端末でいつでも見ることができるので、必要な子は参考にしています。

3. 6年生授業について

Q. この学習課題は、教師からの提案か、子どもたちからの提案か、両者の意見の融合か、教えていただきたい。

学習課題は指導事項に係るものなので、子どもたちからの提案ではありません。しかし、子どもたちの主体的な学びの推進力となるよう、子どもたちの言葉を引き出しながら立てるようにしています。とても難しく毎単元、頭を悩ませています。

Q. みんなの問いを解決する場面では、自分の考えをもつ→対話活動→加除修正（再思考）がよくある流れなのですか？みんなの問いは、児童一人ひとりの納得解として、まとめていましたが、みんなの問いを学級みんなの納得解として、まとめることもあるのですか？

みんなの問いは、「個」⇔「ペア（グループ）」⇔「全体」を往還して解決したり考えを深めたりするようにしています。

まとめは、必ず全員に理解させなければならない部分は、統一してまとめますが、各々で解決した部分は子どもに委ねています。今回の海の命で言えば、推しキャラの「魅力」は必ず書かせる、しかしその登場人物を選んだ背景（自分の生き方・考え方）はそれぞれ子どもによって違うので、各々が自分の言葉でまとめる、というようにです。

Q. 個人の問題をもたせるための、手立てを詳しく教えてください。
「みんなの問いの立て方」について詳しく知りたいです。

教材が自分にとっての「学びの対象」となるように、単元の入口で「読みの構え」をつくるようにしています。また「読み方」「学び方」の蓄積が重点指導事項に関わる問いをもたせることに有効だと考えます。

4. 研究全般について

Q. 参観した授業も含め、展示してあった各学年の単元末の言語活動がとても楽しそうに素敵だと思ったのですが、どうやってこのアイデアや工夫を思いつくのか知りたくなりました。みなさんでアイデアを出し合っているのでしょうか。本校でも行いたいのですが、なかなか考えられずにいます。

言語活動を通して指導目標を達成する国語科において、どんな言語活動に取り組むかは非常に大切です。視点としてはまず、「指導事項にあった言語活動であるか」を確認することです。例えば2年生の単元では、他者との共通や相違を共有することで、自分の考えを広げ深めることが重点指導事項です。ですから、「ロボットの説明書を作ろう」では指導事項にあまり合っていないことになります。共有だからこそ、異なるロボットのすごさについての対話を必要とする「ロボットコンテスト」という言語活動が意味を成すのだと考えます。4年生、6年生も同様です。プラス、やはり学年の子どもの実態に合った、楽しそうな、または自分にとって必要感があるような言語活動になるよう、学年での教材研究が欠かせません。本校では、若手の先生も柔軟に様々なアイデアを考えることができるようになってきました。例として実践記録集やQRコードの指導案にも記載がありますので参考にしてください。

Q. 初めの感想、初めの問いの後に内容と構造の把握をするとのことでしたが、初めに構造と内容の把握をしないのは作品に初めて出合ったときの思いを大切にするためですか。よりよい問いにするために先に構造と内容の把握をするよりよいのではないかと思ったので、教えていただきたいです。

基調提案で説明したように、はじめの感想や問いは、まず大きな「単元の学習課題」を引き出すために不可欠です。子どもたちの言葉と思ひから始まらなければ、結局はやらされる学習になってしまうからです。

感想も問いももたず、最初からあらすじや内容把握をすること自体、子どもたちにはなぜそれをやらなければならないのか不明です。わからないことやわかりたいことがあるからまず「お話を知る」のだと思います。

しかし、何もないところからの感想と問いは、ご指摘のようにその深さに差がありますよね。だからこそ内容把握が意味を成し、自分の問いを更新するからこそ主体性も継続すると考えます。自分の原点としての思ひから始まる学習課題であり、「みんなの問い」であるから、この流れで単元を進めています。

Q. みんなの問いが、教師の想定する学習課題と大きくズレることやうまくまとまらないことはありますか？どのように修正、支援していけば良いですか。

当然、こちらの想定通りいくことはほとんどありません。しかし、だからと言ってこちらでルールを敷いてしまうことは、やはり「学習者主体」とは言えなくなるのだと考えます。子どもたちの話合いがずれた時やまとまらないときは、学習課題に合ったものかどうかの検証をするよう声をかけています。「せっかく子どもが言ったから」「指導事項とズレるけどまあいいか」のような許容の仕方は、結果的に子どもを伸ばす妨げになると考えています。子どもたちの「的確に問う力」も伸ばすため、そこに対して教えることは当然あります。それを繰り返すことで、6年生になるころは比較的にこちらの思ひと重なるように「みんなの問い」が立つようになってきています。

ご参観いただいた先生方へ

質問回答が遅くなってしまい、大変申し訳ありません。本当にたくさんのご質問を頂きましたが、似た系列でまとめさせていただき回答しています。このページを見ても先生方の疑問が解消されない場合は、本校までいつでもお問い合わせ下さい。たくさんのご意見、ご感想、本当にありがとうございました。またどこかで、先生方とお会いできる日を楽しみにしています。

時津東小学校 職員一同（研究担当：横山）